

錦絵が語る「時代」 —明治維新と文明開化

3/7
(土)

多色刷りの浮世絵木版画として錦絵が登場したのは江戸中期。幕末19世紀後半、歌川（玉蘭斎）貞秀などの絵師たちは、歌川国芳などによって普及した大判三枚綴りのパノラマ描写の技法を駆使して、幕末の世相や明治維新、文明開化の日本を描きました。このような錦絵は、横浜絵、のち開化絵とも称され、写真が登場するまで、民衆の視覚に訴える唯一の報道媒体となりました。

文明開化期の錦絵蒐集家として知られる中央大学名誉教授・長谷川聰哲先生は2025年、その膨大なコレクションの中から母校拓殖大学に、学校創設の起点となった近代日本の開港・開市・開国の歴史をたどる作品を厳選し、錦絵（及び石版画、リトグラフ、和綴本等）200点以上を寄贈されました。拓殖大学では、主に開港場（横浜）、外国人居留地（築地）の西洋人、外交・商業施設等を題材とするこれら作品群を、学術性と芸術性を併せ持つ拓殖大学の貴重な財産として、学内外に知らしめ、広く研究、鑑賞に資する使命があると考え、この度、関係分野の専門家を招き、シンポジウムを開催することとしました。

プログラム

基調講演：

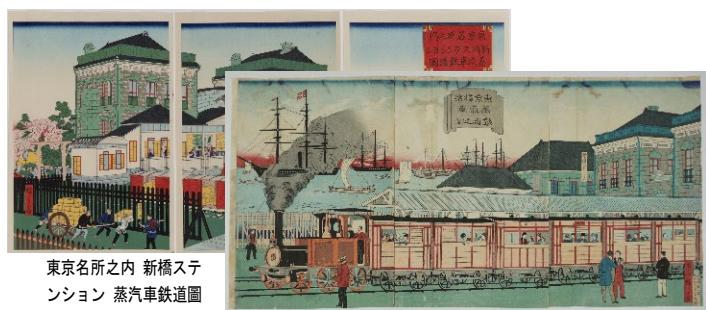
開国通商と立憲君主制の姿
—幕末明治維新期の浮世絵師が伝えた近代国家への歩み—



長谷川聰哲（はせがわとしあき）
中央大学名誉教授 専門：国際経済学
拓殖大学貿易学科 1971年卒業
慶應義塾大学大学院博士課程満期修了
拓殖大学商学部助教授、米国ハーバード大学経済学部、
国際問題研究所客員研究員、中国陝西財經学院客員教
授等を経て中央大学経済学部教授 1990～2019年。
財務省関税等不服審査会委員、税闘研修所兼任講師、
通関士試験委員、北京大学、清华大学客員教授を歴任。
米国通商政策史研究会代表を勤める。

報告：

- 報告1：明治近代化・文明開化としての鉄道——歴史とイメージ
ワシリー・モロジャコフ（拓殖大学国際日本文化研究所教授）
- 報告2：近代居留地の港湾空間における「裏」と「表」
陳雲蓮（群馬大学グローバルイニシアチブセンター講師）
- 報告3：錦絵に見る明治初期の東京と横浜
伏見岳人（拓殖大学国際日本文化研究所客員研究員
・東北大学公共政策大学院長）
- 報告4：日本の物流を支えた横浜
徳永 達己（拓殖大学副学長・教授）



問い合わせ：拓殖アーカイブズ事業室
TEL (03) 3947-7140 E-mail : web_ann@ofc.takushoku-u.ac.jp

共 催：拓殖大学国際日本文化研究所
拓殖大学拓殖アーカイブズ事業室

パネルディスカッション・質疑応答：

司 会：長谷部茂（拓殖大学国際日本文化研究所教授）

